

第2回 「道徳教育について考える会」 開催要項

日時：平成22年10月27日（水）

13：10～16：45

場所：岡山市立津島小学校

1 公開授業参観前の打合せ 13:10～13:30（会議室）

(1) 開会挨拶

くらしき作陽大学 教授 秋山 博正 先生

(2) 参加者紹介

(3) 「道徳教育について考える会」「道徳教育実践研究事業」についての説明

(4) 道徳の公開授業についての説明

2 公開授業(道徳) 13:40～14:25（6年1組）

6年1組 指導者：津島小学校 教諭 久谷 理恵子 先生

資料名：「米百俵」

3 研究協議(図書室) 14:35～16:45

(1) 津島小学校の研究概要・公開授業に係る協議（14：35～15：35）

① 研究概要について

② 公開授業について

指導講評 岡山大学大学院 教授 住野 好久 先生

(2) 道徳教育実践研究事業推進校の取組に関する協議（15：40～16：40）

① 2年目推進校からの報告

- ・ 津山市立鶴山幼稚園
- ・ 岡山市立岡山後楽館中学校
- ・ 県立岡山東商業高等学校

② 質疑応答・意見交換

(3) 閉会挨拶

美咲町立美咲中央小学校 校長 佐々木 勇 先生

目 次

1.	参加者一覧	p 1
2.	6年1組 道徳学習指導案	p 2
3.	岡山市立津島小学校 研究資料	p 5
4.	「道徳教育実践研究事業」推進校資料		
	(1) 研究2年目の推進校		
	① 津山市立鶴山幼稚園	p 13
	② 岡山市立岡山後楽館中学校	p 14
	③ 県立岡山東商業高等学校	p 15
	(2) 研究1年目の推進校		
	① 備前市立日生東小学校	p 16
	② 赤磐市立城南小学校	p 17
	③ 美作市立勝田小学校	p 18

平成22年度第2回道徳教育について考える会 参加者一覧

委員 (五十音順)

秋山 博正	くらしき作陽大学教授
今井 康好	岡山県教育庁指導課長
上原 正之	岡山県立津山東高等学校長
梶田 良枝	岡山県立岡山西支援学校長
片山ひとみ	日本児童文学者協会会員・備前市教育委員会教育委員長
栗本 貞子	倉敷市立水島中学校長
黒山 靖弘	岡山県教育庁特別支援教育課長
佐々木 勇	美咲町立美咲中央小学校長
白神 富子	倉敷市立中洲幼稚園長
田中 広矛	岡山県立和気閑谷高等学校教頭
中川 芳子	岡山県社会福祉協議会ボランティア・NPO活動支援センター所長
福原 洋子	岡山県教育庁生涯学習課総括副参事
藤谷 幸弘	岡山県PTA連合会長
三好佳代子	岡山市高島保育園長

○ 岡山市立津島小学校校内研究 助言者

住野 好久	岡山大学大学院教授
-------	-----------

○ 道徳教育実践研究事業推進校及び所管の教育委員会

岡山市立津島小学校	岡山市教育委員会
岡山市立岡山後楽館中学校	
津山市立鶴山幼稚園	津山市教育委員会
備前市立日生東小学校	備前市教育委員会
赤磐市立城南小学校	赤磐市教育委員会
美作市立勝田小学校	美作市教育委員会
岡山県立岡山東商業高等学校	岡山県教育委員会

○ 岡山市立津島小学校職員

○ 県教育庁指導課

1 関連的な道徳の学習のテーマ

郷土を愛し、行動できるようになろう。

2 関連的な道徳の学習のねらい

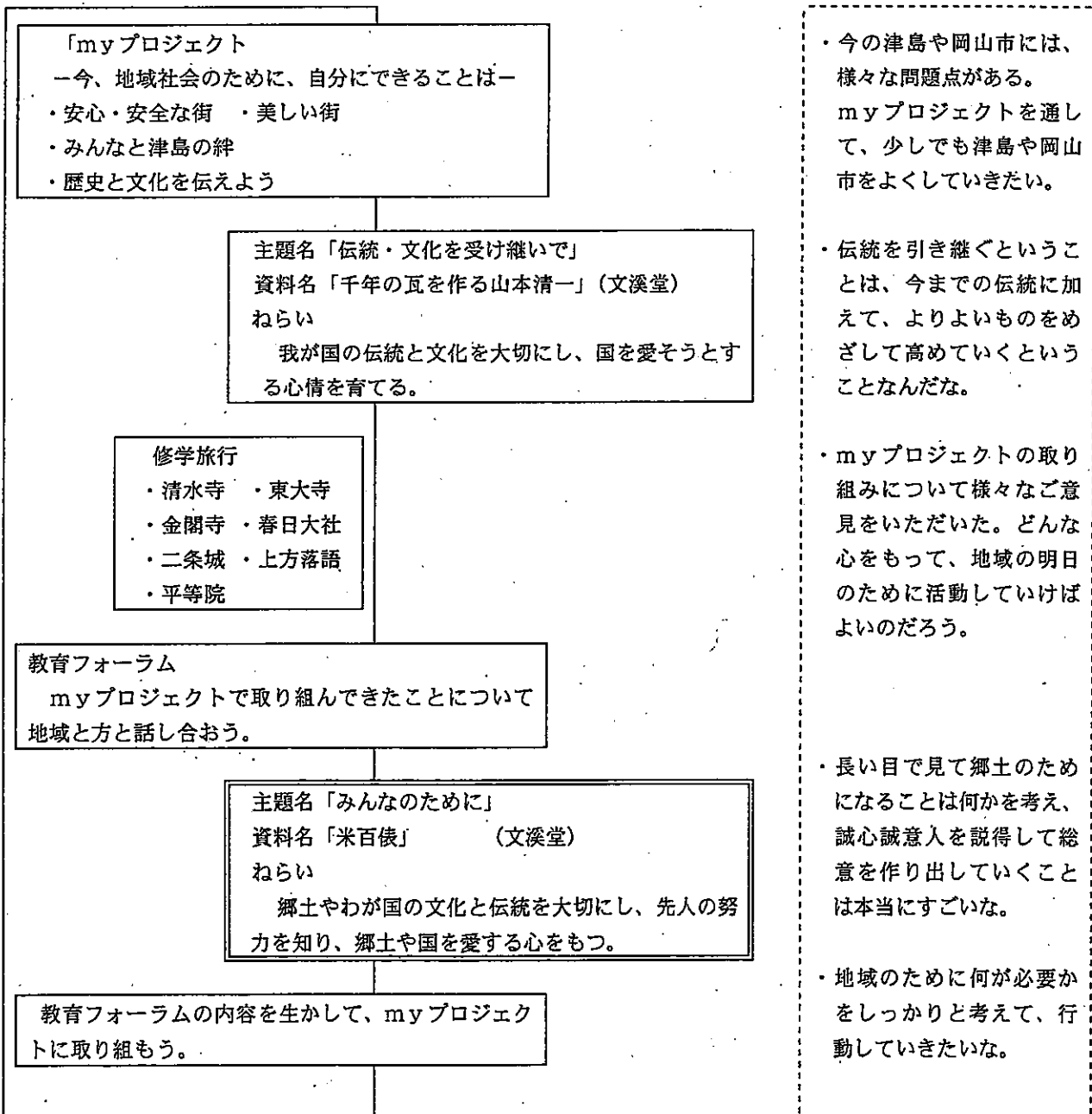
郷土や国の発展に尽くし伝統と文化を育てた先人の努力を知り、自分もまたそれを継承し発展させていくすばらしさを感じ、そのために努めようとする心構えを育てる。

3 構想図

【総合的な学習の時間等】

【道徳の時間】

【児童の意識】



4 要となる道徳の時間

- (1) 主題名 みんなのために
資料名 「米百俵」(文溪堂)

(2) 主題設定の理由

① 内容項目について

急速に国際化・情報化が進む現在、多くの人々と支え合い、助け合って国際社会に貢献できるような力が求められている。子どもは、家庭・地域社会の中で成長していく。

子どもが生まれ育った郷土の自然や文化、歴史、先人の生き方に目を向け、生きることの意味を知り、誇りをもって努力しようとすることは、国際的に活動しようとする意欲の基盤になる。そこで、先人の努力への尊敬と感謝を通して、郷土を愛する心を育てたい。

② 児童の実態

本学級の児童は、生活科や社会科の学習などを通して一定の郷土の知識を持っている。また、地域行事に参加したり、日常生活で近隣の自然や伝統行事にふれたりして、地域を学ぶ数多くの体験をもっている。しかし、郷土の文化や伝統と自分とのかかわりについては、意識が及んでおらず、先人の努力や周囲の人々からの恩恵にも気付かずに生活している。

③ 資料について

中心資料は、「米百俵」(文溪堂)である。戊辰戦争で敗れた長岡藩は禄高を減らされ、藩士たちは食べ物にも困っていた。そうした中、支藩から米百俵が送られ藩士たちは喜ぶが、小林虎三郎は、「将来のために、人物を養成することが大切である」と説き、学校を建てるという話である。

この資料は郷土愛を中心的な価値に「長期的な視野で考える」「冷静に話し合う」などの周辺的な価値が支えている。そこで、話し合いでは、郷土愛を中心に周辺的な価値についても子どものとらえに応じて話し合うことで、価値のとらえをより豊かにしたい。

④ 個人研究テーマとの関連「問いを立て、学び合う中で、価値を社会的に構成する道徳を求めて」

・子ども達が問いを立てるために

子どもが立てる問いは、初めから明確で論理的なものではなく、「気になる」「よくわからないのだけれど」などというような曖昧なものから始まる。そこで、資料に出会う時間をしっかりととり、自然な流れでペアやグループでの話し合いができるようにし、明確な言葉になりにくい子どもの思いを語り合う中で問いを立てることができるようにする。

・価値を社会的に構成していくために

立てた問いを元に子ども達の言葉をつないで、ねらいとする価値やそれを支える価値について、子ども達の多様な価値観や体験、素朴な思いを織り込みながら話し合いを進めていくことで、一人一人の子どもが自己との対話を重ね、そうした価値を自分の言葉に直して自分の文脈でとらえられるようにしていきたい。また、子どもの学びがふくらみそうな場面、何人かだけの学びになりそうな場面などで、グループ学習を取り入れ、一人一人が考えを十分に話し聴き合いながら考えることができるようにする。

振り返りについては、私はいつも木に竹を接いだようになってしまう。本時では、本時のめあてとつないで、前段を踏まえて「自分達は？」という視点から考えることができるようにしたい。また、一人一人の子どもが話し合いを通してじっくり考え、社会的に価値を構成する場を保障するため、グループ活動を取り入れたいと考えている。

(3) ねらい

郷土の文化と伝統を発展させるための先人の努力を知り、郷土の発展を願う強い思いを根幹に、長期的な視野をもって郷土を発展させていこうとすることの大切さについて考えることができる。

(4) 展開

学習活動	主な発問と児童の心の動き	教師の支援
1 本時のめあてをつかむ。	○みんなは津島が好きですか。 ・自然が多いから好き。 ・おじさんやおばさんが優しいから好き。 ○みんなは津島を愛していますか。	・ 地域を愛するということ 米百俵と板書し、本時のめあてに目を向けることができるようにする。
「地域を愛する」とはどういうことだろう。		
2 「米百俵」を読んで話し合う。	○初めに先生が読みます。2回目は一人一人目で読みます。しっかりと「米百俵」と出会い、心に残ったことや、引っかかることを後で発表しましょう。 ○どうでしたか。 ・虎三郎と藩士たちが話し合っているところがなんとなく気にかかる。 ・長岡藩のことを考えて学校を建てようとする虎三郎は、今のことだけを考えているのではない。 ・生活が苦しくて、すぐにでも米を分けてほしい藩士たちの気持ちもよく分かる。 ・考えをじっくり聞き、心を合わせて学校づくりに取り組んだのはすごい。 ○津島を愛するということはどういうことなのだろう。 ・津島の未来のことまで考えて、本当に大切なことを見極めること。 ・津島のために、困難も乗り越えながら行動していくこと。 ・みんなのために、何が大切なのかをしっかりと話し合いながら進めていくこと。	・題材にしっかりと出会えるように、題材と対話する時間を保障する。 ・自由にペアやグループで話し合い、感動や疑問を一人一人がもちやすくする。 ・子ども達から出た問いを元に虎三郎の郷土の愛し方に対する価値観について考えることができるように、話し合いをコーディネートする。 ・周辺的な価値についても、子どもから出れば取り上げ、中心的な価値のとらえをより豊かなものにしていく。 ・必要に応じて、グループ活動を入れる。 ・一人一人の子どもが、話し合いを通してじっくり考え、社会的に価値を構成することができるように、グループ活動を取り入れる。 ・子ども達の求めがあれば、大人は津島を愛するということをどう考えるのかについて、語ってもらう。
3 今日の学習を振り返る。	○「今日の学び」を書きましょう。 ・津島を愛する心を大切にしながら、myプロジェクトに取り組んでいきたいな。	

1 本校の研究主題

子どもの学びを豊かにする授業づくり

～「対話」を通して、共に学び合う喜びを感じ、考える力を高める授業づくり～

基礎学力の定着は、スキル学習やドリル学習など基礎的な事柄を一人一人に習得させる指導に力を入れることで一定の効果は表れてくる。これらは学力の基盤となるものであり、今後も大切にしていきたいことである。しかし、スキル学習やドリル学習、教師の説明を中心とする一斉授業だけでは、創造的で論理的な思考力や表現力・判断力は育たない。また、昨今の子どもに十分でないと言われる豊かな人間性や社会性の発達の面からも同様である。こうした学力や人間性、社会性を高めていくためには、一人一人が対象や他者と出会い、学び合うかかわりの中でそれらと対話を重ねて、より豊かな認識を共有していくことができるようにふだんの授業の質を高めていく必要がある。

「豊かに学ぶ」ということを、本校では、「一人一人全ての子どもが、学び合う中で感動をもった『変容』を遂げていくこと」ととらえる。つまり、対象と出会い、追究の価値を感じた子どもが同じように対象と出会った仲間との対話や活動を経験し、自分自身との対話を繰り返しながら、認識を広げたり深めたりしていく過程で、「分かった」「できた」「学んでよかった」という満足感をもち、さらに新たな追究へ向かう一連の自己変革の姿であると考えている。このような学習活動を通して、他者とともに自ら課題に挑戦し、自分たちの道筋で追究し、発見や創造を生み出し、豊かに表現していく力にまで広げていきたい。

そのために授業では、一人一人の考え方や感じ方を基に、多様な考えを摺り合わせ、互いを尊重しながらかかわり合う営みをつくり出すことを大切にしたい。こうした豊かな学びは子ども達に学ぶ喜びを与え、人間性のある豊かな学力を形成し、人とかかわる愉しみを実感させると考えている。

2 研究の内容

(1) めざす学び

子どもの学びを豊かにするために、大切にしたいことは、子ども同士の互恵的な関係やさりげないつながり合いのような「聴き合い、つながり合う関係づくり」である。「分からない」「教えて」と言えば、それに対して、さりげなく根気強く「これはね・・・」と教えてくれる仲間や教師がいる。分からなさを受けとめてもらうことで、子ども達は学ぶ意欲をもつ。

学び合いは、互いの声に耳を傾けることから始まる。「聴く」という静的な行為には、しっかり思考し、次の思考を準備するという動的な行為が含まれている。そのためには、話の内容を注意深く自分の考えと比べて共感的に聴くようにすることが大切であるが、それらをスキルとして身につけさせるのではなく、ふだんの授業の中で、教師自身をモデルに自然に身につけていけるようにしていきたいと考えている。そして教師はどの子の発言も大切に受けとめ、小さなつぶやきや予想外の発言にも耳を傾け、そこにある複雑な「つながり」や全ての子どもの発言の中にあるキラッと輝く真実を見つけ出し、子ども相互のかかわりを築いていきたい。

このように、私たちは子ども達がやわらかく互いに相手を尊重しながらかわり合い、次のように目を輝かせて高め合う姿を求めている。

「共感」 「ああ、そうだ。そういえば、こういうことだもんな。」

「比較」 「へえ、Aさんはそう考えるのか。ぼくの考えと違うけど、おもしろいな。」

「疑問」 「それ、どういうこと?」「分からん。」

「結びつけ」 「Bさんの考えと私の考えをつなげたら、・・・ああ、こういうことか。」

「葛藤」 「この考えとこの考えは違うけど、どちらも納得できる・・・一体どういうことだろう。」

「追求」 「こうじゃないかな。」「いや、こうも考えられるよ。」

「発見」 「そうか、わかった!」「みんなで考えたら、こんなすごいことが分かったよ!」

学びの場面で、子どもは考え方や生き方が違う相手と、学習対象に対して、お互いの考え方の違いを目の前において、どこがどう違うのか双方が確かめ、「考え方の擦り合わせ」、すなわち「対話」を行っている。そうした際に重要なことは、相手の話に深く耳を傾ける「聴く」姿勢と、双方の違いを慎重に吟味する「受けとめ合い」である。私たちがめざすのは、考え方の違う相手を言い負かすことではなく、双方がそれぞれの考え方の違いを乗り越え、「第三の考え方」を創り上げることなのであり、「対話」によって学びは豊かになると考える。丁寧に聴き合いながら、一人一人が自分の考えとつなげて考え続けることが、子どもの考える力を高め、その時、そのメンバーでしかたどり着けない学びを創り出していくことが学び合う喜びを育んでいく、と私たちは考える。

こうした学びは、以下に示す「対象との対話」と「他者との対話」と「自己との対話」が一体となった活動であり、授業の中で有機的に結びつき往還する。授業者はこの3つの対話を頭に描きながら、授業前はもちろん授業中にも授業をデザインして進めていく。また、参観者はこの3つの対話を視点として子どもの学び合いを見取っていきたいと考えている。

A 対象との対話:「活動的な学び」

単元や題材に子ども自身が出会い、学習対象にかかわっていくことを大切にしたい。「させられる」授業でなく、「出会う」授業、「働きかける」授業として、一人一人が学ぶ必要感を意識し、問題解決的な学びができるよう、学習をコーディネートしていきたい。

B 他者との対話:「協同的な学び」

共に学ぶ仲間として、友達にかかわっていくことである。共に語り合ったり力を合わせたりしながら、互いを認め合い、補い合い、高め合うような学習を目指したい。

人間的なつながりやそれぞれの個性を大切にすることで、一人では味わえない友達と一緒に学ぶ授業のよさを感じられる学習をつくっていききたい。

C 自己との対話:「内省的な学び」

対象との出会いの中で自分の思いや考えをもったり、他者の考えを受け入れ自分の言葉として再構築したり、他者の多様な意見をヒントに自分の考えを高めたりするなど、学習活動は常に自己との対話をしながら進められるようにしていきたい。

学んだことを自分の中に位置づけたり、自分の中から呼び起こしたりすることで、達成感、自己肯定感、さらには課題の発見などを促し、学習の意義を感じたり学習の原動力になったりしていくものと考えている。

(2) 教師の手だて

私たちは、このように、子ども達が主体的に対象や他者や自己と対話し、それらをつなぎながら、また、話題の論点を元に修正するなど原点にもどしながら一人一人の子どもが豊かに学び合うことができるように育てていきたいと願っている。そのために、教師の授業における具体的な手立てとして、「聴く」「つなぐ」「もどす」の3つを考えている。

教師が子どもの発言をどのように聴き取り、自然な子ども同士の話し合いに発展させるか、「つなぐ」や「もどす」などの手だてを取るか、常に子どもの学びの様子を見取る必要がある。このことから「聴く」は、「つなぐ」「もどす」の基盤となるものであると考えている。

聴く

「聴く」は、3つの対話（対象との対話、他者との対話、自己との対話）を手がかりに、子どもの発言を聴いていくことと考えている。つまり、次のような聴き方である。

＜対象との対話＞その子どもの発言は教材のどことつながっているのか。など

＜他者との対話＞その子どもの発言は他の子どもの発言とどうつながるか。どう違うか。など

＜自己との対話＞その子どもの発言は前の発言とどうつながるか。どう変化しているか。など

子ども達が友達の話に耳を傾けて、聴き合うことができるようになるためには、教師が、「ねらい」に合う意見をチョイスするのではなく、一人一人の子どもの考えのよさや違いを聴き取り、それを生かして授業の中に位置づけていくことが大切である。このような教師の聴き方が、子ども達の互いの考えのよさや違いを聴き合いながら学び合う関係を支えていくと考える。

★そのために留意すること★

- ・子どもの問題意識を大切に学習にし、聴くことによってできた授業の流れが指導案通りにいなくても、ねらいに沿ったものであれば、教師の考える正答を教え込もうと考えない。
- ・子ども達の意見がつながり合っているとき、教師は聞き役に徹し、自分の意見はできるだけはさまない。

つなぐ

「つなぐ」は、3つの対話（対象との対話、他者との対話、自己との対話）を手がかりに、子どもの考えと子どもの考え、子どもの考えと教材、一人一人の子どもの経験などを布を織り上げるように、紡いでいくことと考える。そのために大切なことは、「対象としっかり対話させる」「話し合いでつなぐ」「子どもの考えから学びを構築する」の3つである。

「対象としっかり対話させる」とは、一人一人が「おや?」「いいなあ」「なんとなくひっかかるなあ」などの新鮮な思いや考えを抱きながら対象とかかわれるように、手立てを工夫したり時間を保障したりすることである。

「話し合いでつなぐ」とは、「〇〇さんと似ているね」「どこからそう思ったの?」「〇〇さんの考えをみんなはどう思いますか」等の言葉かけで、子ども達が友達の影響や教材との関わりを意識できるようにすることである。そうしたつながりから、子ども達は様々な考え方を自分の中に取り入れて認識を広めつつ、考えのずれからよりよい考えを生み出したり、今までの自分の考えを深めたりして

いくことができると思う。

「子どもの考えから学びを構築する」とは、教師が一人一人の子どもの考えの内容とその発言の間のつながり、発言と教材とのつながりを聴き取り、一人一人の子どもの考えを基に、学びを構築していくことである。教師は、そのような様々なかかわりを支えていくコーディネーター役である。

★そのために留意すること★

- ・どうしても必要な重要な発問を絞り込んでおく。子どもの意識の流れに沿いながらも、子ども達の考えが深化する場面は教師が落とさない。深まりのある揺さぶり発問を考えて授業を構築する。
- ・子どもが自分の経験と結びつけて自分の思いを発表する授業を大切にする。根拠となる教材や文章などが、一つの言い方や意味だけでなく、自分の実生活での体験などに結びついた言葉として、発言できることを大切にする。

もどす

「もどす」は、3つの対話（対象との対話、他者との対話、自己との対話）を手がかりに、話題の中心がぼやけてきたときや、活発な話し合いが展開しているが何人かだけの学びになっているときなどに、論点を修正したり、整理したりして原点に戻すことととらえる。

方法としては、何について話していたか、めあてや話題の中心などにもどしたり、手がかりとなる教材や文章などにもどしたり、学習形態を変えてペアや小グループを取り入れたりする。そして、一人一人が確実に学習に参加でき、より深い学びに到達できるような授業をめざしていきたい。

★そのために留意すること★

- ・学びを深めるチャンスや一人一人を学びに巻き込む必要性など、教師はペアや小グループにもどすタイミングを見極める。
- ・根拠に基づいてみんなで考えていく授業に構成し、話題が根拠に基づかないものになったときには、教材など根拠となりうる具体的な対象にもどすように 教師は気を配る。

3 道徳

(1)道徳における学びとは

子どもは日々のくらしや各教科・領域等での体験活動、及び道徳の時間の中で、様々な道徳的価値について考えたり意識したりしている。これらの中で、自分の気持ちや行動の変化などに目を向けたら、自分の中にある新たな気持ちに気づいたりして、実践への意欲が高まったときに、子どもの中には喜びや感動が生まれる。

道徳の時間においては、中心的な資料を生かし、子どものこれまでの日々のくらしや各教科・領域等での体験や、資料、あるいはその登場人物などに対する感じ方や考え方を交えながら話し合いを深めていくことが学習の中心となることが多い。子どもは自分なりの価値観と比べ、自己との対話を繰り返しながら登場人物などの気持ちに迫ることで、対象である資料や道徳的価値とも対話をしていく。さらに、話し合いながら友達考えに触れ、他者との対話をしながら考えを深めることによって、道

徳的価値の意味などについて考え、その大切さに気づいていく。そしてとらえた価値に沿って自分自身を見つめなおし、「自分も〇〇したいな。」「これからもがんばろう。」などと徳的価値を自分なりに発展させていこうとする思いをもつことによって、価値の内面的な自覚を深めていく。

このような徳の学習の中で、よりよくなろうとする自分の変容を感じて自己を肯定的に受けとめたり、今の自分や将来の生き方の課題を考え、それを自己の生き方として実現していこうとする願いをもったり、思いを深めたりすることができるような学びとならなければならない。

(2) 教師の手だて

* 徳の時間において

徳の時間において共に学び合うためには、友達の考えを聴き、子どもが多様な感じ方や考え方をつなぎ合い深めていくようになることが求められる。豊かな学びとなるために、次のような点を大切にしたい。

聴く

徳の時間において「聴く」こととは、他者理解の支えとなるものである。他者、つまり資料中の登場人物や共に学ぶ友達、社会の中の人々への理解が生きてこそ、徳的価値の自覚につながる自己理解が深められていく。教師が、子どもなりの経験や理解が発言のどこに反映されているのかを慎重に聴くことで、子ども達も友達の話に真剣に耳を傾けていくものと思われる。

- ・その子どもは何に心を動かされているのか。
- ・他の子どもの発言のどことつながっているのか。
- ・その子どもの前の発言と、どうつながっているのか。
- ・その子どもの発言がどのような日々のくらしや体験活動とつながっているのか。
- ・その子どもの発言が、日々のくらしや体験活動で抱いたどのような思いとつながっているのか。

つなぐ

子ども達は友達の考えや、日々のくらしや体験活動などのつながりを意識することで、対比や修正が生まれ、共感的追究からさらに価値の自覚が深まっていく。

- ・子どもの考えと子どもの考えとをつなぐ。
- ・その子ども自身の前の発言とつなぐ。
- ・一人の発言やグループで話し合われたこと、表現活動（役割演技など）で出だされた考えなどを全体につなぐ。
- ・子どもの発言と日々のくらしや体験活動とをつなぐ。
- ・子どもの発言と日々のくらしや体験活動で抱いた思いとつなぐ。

もどす

話し合う中で、全体で問題になったりずれが生じたりしたとき、価値の捉えをはっきりさせたい

ときなどを教師は見極め、効果的にもどすことが、主体的な学びによる価値の自覚の深まりにつながっていく。

- ・問題意識や登場人物などへの共感によって捉えた考えにもどす。
- ・話し合いで気づいたことや考えたことにもう一度もどす。
- ・ペアや小グループを取り入れる。

* 関連的な道徳の学習において

学習指導要領解説・道徳編には、子どもが自己の生き方について考えを深めることができるようにするために「道徳の時間はもとより、毎日の生活や学習においても、自分の日常の姿を振り返ったり、伸ばしたい自己像や自己目標などを意識したりする機会を充実していくことが求められる。」と述べられている。そこで、次のような点を大切にしながら、関連的な指導を取り入れていく。

- ・道徳的価値が意識しやすい場づくりや、体験活動の充実を図り、課題意識をもって取り組むことができるようにすることで、子どもの心をたがやす。
- ・体験活動の中で抱いた気持ちを出し合える中心発問や活動を工夫したり、今までの自分を具体的に振り返りやすい発問や活動を工夫したりして、道徳の時間に、子どもが自ら日々のくらしや体験活動とつなぐことができるようにする。
- ・道徳の時間でとらえた思いを「やっぱりこのことは大切なんだな。」「○○のようにしてみたらうまくいったぞ。」などと、確かにする場を設定したり、活動のさせ方や掲示物などの工夫をしたりすることで、道徳の時間に学んだことと日々のくらしや体験活動とをつなぐことができるようにする。

4 研究の方法

一人一人の教員は、教育に関する専門家であり、校内研究を通じて、一人一人の専門性を高めていくことを目的とする。そこで、研究は一人から始まり、協同研究を経て再び一人に戻る。そして、それが、一人一人の日々の授業実践（聴き合う関係を育て、対話型授業を創る）の向上につながっていくようにする。こうした考えの下に、校内研究主題を受けて、各自の個人研究テーマを設定し、授業実践とその後の協議を核として研究を進める。

協同研究を通して、教師が共に学び合うことを大切に、年1回のフランス料理のフルコースのような研究ではなく、子ども達の日々の成長を継続して支えるおいしくて栄養のある総菜料理のような研究を目指したい。

○ 公開授業について

- ・1人年2回以上公開授業（全体公開授業を含む）を実施する。
- ・公開授業の実施の連絡は全教職員に行い、指導案も全員に配付する。
- ・個人名を出しながら研究協議ができるように、児童名を書いた座席表を付ける。
- ・学年会で、授業づくりを話題にし、日常的なものとしていく。
- ・授業者は、子どもの学びを見取る目を育みながら、個人研究テーマに沿って、自分らしさを生かした授業を模索する。

<公開授業の参観の仕方>

- ・公開授業を通して、子どもの学びを見取る目を鍛え、その授業を通して必ず何かを学ぶという意味で一期一会の授業と心得、参観させていただく。
- ・一人一人の子どもの意見や表情、しぐさから、その学びと育ちを見取る。そのために、表情が見えるような場所で授業を参観する。発表していない子どもの学びも慎重に見取る。
- ・子ども同士の考えのつながりや教材とのつながり、生活経験などとのつながりを考えながら、一人一人の考えと学びの深まりを見取る。
- ・授業者の意図を尊重し、実践者として子どもを観察する。
- ・ペアやグループでの話し合いや学習の様子など、授業者が気付かない子どもの小さな学びを多面的に見取る。
- ・学級全体の雰囲気、子どもの声の調子、集中度、受けとめ方、教師の声の調子、間の取り方、立ち位置、つなぎ方、返し方、板書の仕方など、総合的に見取る。

<全体公開授業>

- ・各学年とあおぞらの7授業。(3学期の研究発表会を含む)
- ・低・中・高学年で道徳、国語科がそれぞれ1回ずつ実施できるようにする。
あおぞら学級は、道徳や国語科の要素と「対話」があれば教科・領域にこだわらない。
- ・指導案は、通常通り。
- ・授業記録は公開学年でとり、協議までに印刷・配付する。
授業写真は低中高の隣接学年でとる。

<学年部内公開授業>

- ・部内公開授業は国語科、道徳以外でもよい。
- ・指導案は、A4 1枚、全教職員に配付する。
- ・学年団で見合って、研究推進委員が中心となり協議する。
- ・公開授業は、原則として研究日に実施したり、その日にできないときはそれまでにVTRで撮影したりしておき、学年部会の日に研究協議をする。

○ 研究協議について

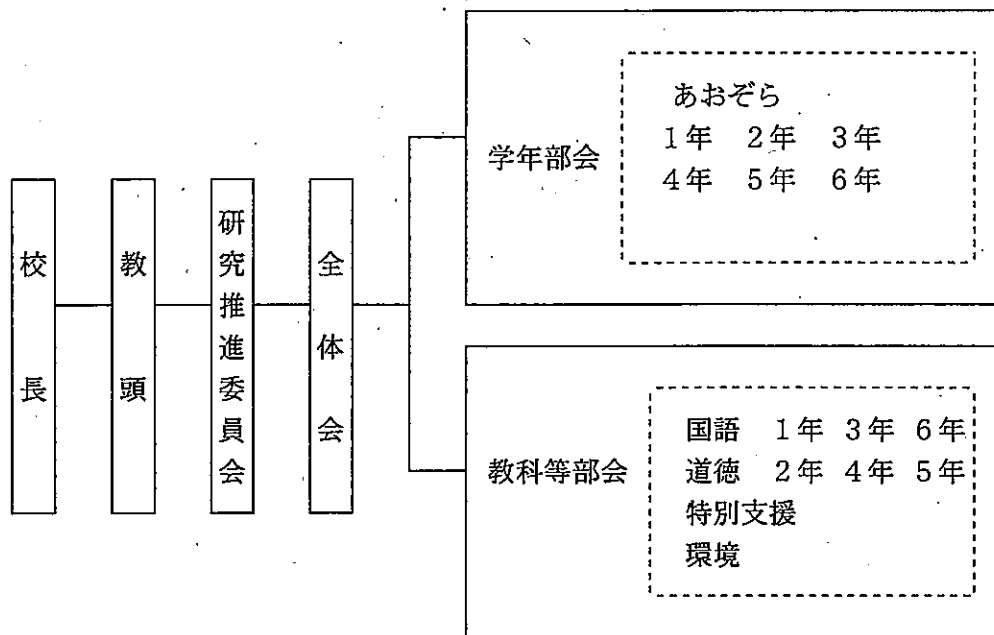
研究協議をリフレクション(教師が授業中の出来事を具体的に振り返ることを通して、何らかの「気づき」を得て、自らの授業をとらえ直すこと)の場としてとらえ、専門家として育ち合うために、研究協議において教員一人一人が意見を出し合い、学び合う関係を大切にしていきたい。そして、出した子どもの学びの姿をもとに、それらのつながりを対話や「聴く」「つなぐ」「もどす」の視点から総合的に捉える目を鍛え、子どもの発言や問題意識をとらえて、授業を構想し、授業中も子どもの考えに応じて学びをデザインし、創造していく力を高めていく。

<協議で大切にしたいこと>

- ・一人一人の教師が見取った子どもの小さな学びの姿を具体的に語り合うことで、子どもの学びを多様に見取ることができるようにする。
- ・学びが成立したのはなぜか、学びがつまづいたのはなぜかを考える。成立させるには子どもの考えにどう寄り添えばよかったのか、という視点で話し合いを深める。
- ・その授業をとおして自分は何を学んだかを話題にする。

- ・自分のふだんの授業での悩みや取り組みとリンクさせながら話し合いに参加する。
- ・授業者の意図を尊重しながら提案をするが、「ああすべきではなかった」「こうした方がよかった」などの指導や助言はひかえる。
- ・教師同士が学び合おうという謙虚な姿勢で、全員1回は感想や意見を言う。

5 研究推進体制



<学年部会>

- ・学年部会を中心に授業研究・研究協議を実施する。
- ・専科・少人数指導等は、関係の深い学年団に所属する。

<教科等部会>

- ・教科等部会は、必要に応じて、研究発表会の指導案、全体計画、年間計画、指導の重点等の検討を行う。低学年・中学年・高学年からそれぞれ国語部・道徳部に学年単位で入る。
- ・環境部は、保健室や図書館、学校全体など環境づくりについて検討する。

推進校名	津山市立鶴山幼稚園	担当者名	矢野 佳子
所管の教育委員会	津山市教育委員会	担当者名	影山 哲也

1 研究の概要

(1) 研究テーマ

自分で考え、行動できる子どもの育成 ～子どもの心の動きをとらえて～

(2) 研究の内容

○自分で考え、行動できる子どもをはぐくむ教師の役割

教師は幼児理解の基本に立ち返り、願いをもちながら、認めたり、励ましたりするなど一人一人と丁寧にかかわったり、教師自身がよきモデルとなったりすることが大切である。そのために、教師自身が常に道徳的な意識をもち、きまりを守り、言動に気を付けるとともに、感性を磨いていく。

【具体的な取り組み】

- ・行動を振り返ることができるように幼児の気持ちや行動を肯定的に受け止め、寄り添うようにする。
- ・やってみようという気持ちや好奇心を膨らませることができるように認めたり、励ましたりする。
- ・教師が幼児の気持ちを受け入れたり、寄り添ったりする姿を日々の生活の中で幼児が見たり、感じたりできるように教師が相手を思いやる姿のモデルとなる。

○規範意識や人とのかかわる力の芽生えを培う日常の活動

人とのかかわる力や規範意識の芽生えが育つよう日々の記録を元に話し合いを重ね、意図的・計画的な保育の中で心の育ちを評価しながら、幼児が生き生きと遊べる保育や環境を考えていく。また、きまりやよいこと、悪いことを分かりやすくするために保育や環境を工夫していく。

【具体的な取り組み】

- ・異年齢で交流する機会をつくったり、日常の問題点を教師がわかりやすく表現してみんなで考えたりしていく。
- ・自然とのかかわりや園外保育などを通して直接体験や感情体験ができるようにする。
- ・“にこにこコーナー”や掲示物の充実と見直しをする。
- ・絵本に親しみ、心豊かな子どもになるように“にこにこえほん”のコーナーを充実させる。
- ・“にこにこになあれ”のコーナーで友達のよさやよいことをわかりやすく知らせる。

○家庭や地域等との連携による一体的な推進のあり方

保護者が見通しをもって安心して子育てができるように、幼児の育ちや幼児とのかかわり方をわかりやすく伝えながら、一体的な取り組みを進めていく。また、共に実践していく中で、相互に応答性のある保護者との連携に努めていく。

【具体的な取り組み】

- ・アンケートをとり実態や成果を探る。
- ・親子一緒に絵本を借りる。
- ・保護者や教師のおすすめ絵本を紹介し合う場を設ける。
- ・“にこにこクラブ”の保護者の方におすすめの絵本を読んでもらう。
- ・“にこにこになあれ”の掲示で幼児のよさを保護者へ知らせ、保護者にも幼児のよさを見つけてもらう。
- ・様々な人とのかわりかもてるように近隣のグループホームや老人会の方、小学校、未就園児親子との交流を進めていく。

(3) これまでの成果と課題

- 教師は幼児の行動のみにとらわれず、幼児の言動や表情から心の動きをよみとることを大切に幼児理解してきた。一人一人の気持ちに寄り添った援助をしてきたことで、幼児の自己コントロールする力につながった。
- 教師は振り返りの時間を大切にしてきた。また、園全体で振り返ることができるようにした。相手の思いに気付いたり、自分の気持ちや行動を振り返ったりできるようになってきている。
- 保護者自身も直接見たり、感じとったりできるように、保護者を巻き込む取り組みや保護者の意識を高めていくための工夫をしたことで、保護者と共に幼児の育ちを感じたり、考えたりして、応答性のあるものとなった。
- 道徳性の芽生えが、日々の生活の場で培われていく中で、教師の役割の重要性を再確認した。今後も教師が幼児の心の動きを敏感に感じとることができるように努力し、教師自身や保育の振り返りをして、職員間で話し合うことで保育の質を高めていきたい。

2 今後の公開授業・研究発表会の予定（日時等）

10月26日 研究発表会開催

道徳教育実践研究事業推進校の研究協議 資料

推進校名	岡山市立岡山後楽館中学校	担当者名	服部 由利香
所管の教育委員会	岡山市教育委員会	担当者名	長瀬 尚樹
<p>1 研究の概要</p> <p>(1) 研究テーマ 「体験活動を通して育む豊かな心と道徳性」 －思いやりの心をもち、自ら判断して行動する生徒の育成－</p> <p>(2) 研究の内容</p> <p>① 学校全体で取り組むために、道徳教育全体計画・年間指導計画の改善を図る。 ② 体験活動とそこから得られる道徳的な価値について関連を明らかにし、道徳の時間での活用を図るとともに、体験活動そのものの充実を図る。 ③ 道徳の時間の指導の改善・充実を図る。 ④ 「校則は社会のルールとマナー」としている本校の「規範意識」醸成に向けて、高等部と連携することで実践的な取組を計画的に進める。</p> <p>(3) これまでの成果と課題</p> <p>① 全体計画別様として、「分野・領域関連表」を作成したことにより、この表の中で、道徳の時間と他の分野・領域との関連を知ることができるとともに、同じ内容項目がどの時期の道徳の時間で指導されているかを確認しながら各教科等での指導を行うことができた。また、年度末には見直しを行い、他の分野・領域との関連を考えながらねらいとする内容項目を吟味し、次年度に向けて改善を図ることができた。</p> <p>② 体験活動を道徳の時間に生かす取組の中で、体験活動そのものについてねらいとする道徳的価値を分析したり、活動に工夫を加えたりすることができた。また、研究の二年次からは、体験活動を終えた後、「その活動を通して、24の内容のうちどれが大切と思ったか」というアンケートを行って生徒の意識を把握した。このことにより、教員が各体験活動のねらいが達成できたかどうかを知る手掛かりとなるとともに、生徒の感じ方や考え方の傾向をつかむことができた。そして、その結果を道徳の時間の指導や日常の生徒指導に生かすことができた。また、ねらいに対する達成度が明確になることで、次の体験活動の内容や準備段階での工夫を行うことができたり、次年度に同じ体験学習を行う際の工夫や改善につなげたりすることができると思われる。</p> <p>③ 2年間の研究の最も大きな成果として、道徳教育に対する教員の意識の変化が挙げられる。職員室で道徳授業のことが話題に上るようになり、研究授業とは関係のない普通の授業でも、方法や内容を教員同士で討議する姿がよく見られるようになった。そして、道徳の時間についてさまざまな工夫が見られるようになった。</p> <p>④ 「規範意識」醸成に向けては、開校記念行事として行う討論会や生徒会執行部による取組を通して、中等部独自に行ってきた。一方で、平成24年度の新校舎への移転に向け、この数年間で中高一貫教育校としての教育方針の柱の検討を行ってきた。新校舎では、中学生と高校生が同じフロアで生活を共にすることになっており、高等部と連携した「規範意識」醸成に向けての取組は不可欠なものである。今年度は、具体的な取組といえる形にはなっていないが、今後の継続課題として実践的な取組の計画を検討中である。</p> <p>今後の課題として、道徳教育の全体計画や年間指導計画を見直し、道徳の時間の指導の一層の改善・充実を図ること、また、中高一貫教育校として道徳教育の面でも高等部との連携を図り、6年間を見通した計画的な道徳教育を行うことが挙げられる。そして何より道徳教育に対して高まった教員の意識が2年間の研究の終了とともに再びもとの状態に戻ることのないよう、この研究の成果を生かしていきたい。</p> <p>2 今後の公開授業・研究発表会の予定（日時等） 11月22日（月）13：25～、本校にて研究発表会を行う予定である。</p>			

道徳教育実践研究事業推進校の研究協議 資料

推進校名	岡山県立岡山東商業高等学校	担当者名	木村 隆
所管の教育委員会	岡山県教育委員会	担当者名	津田 富代
<p>1 研究の概要</p> <p>(1) 研究テーマ 商業（ビジネス）教育における道徳的実践力の育成 ～東商デパートの取り組みを通して育むビジネスマインド～ * ビジネスマインドの中に、自主性、マナー、協調性、責任感、倫理観、共感する心、感謝の心、社会貢献等の内容を含む。</p> <p>(2) 研究の内容 ① 「東商デパート」での教育実践を、新たに「道徳教育」の視点で捉えて整理し、道徳的実践力を身につけさせるという観点で再構築を図る。 ② 「東商デパート」を道徳教育推進の柱と位置づけ、全校指導体制の在り方を探る。 ③ 「道徳教育」の全体計画、指導計画の実施に向けて研究。</p> <p>(3) これまでの成果と課題 ① 「東商デパート」を道徳教育推進の柱として、各教科・科目や特別活動等の教育活動全体を通じて、道徳の重点目標、学校教育目標へ向けた取り組みを図る全体計画を作成し、教職員全体の共通理解を図った。 ② 生徒が業者との交渉を通して社会との関わりを研究し、ビジネスマナー等を含む道徳的実践力を養っている。 ③ 店舗設計において、お客様（特に社会的弱者等）の目線に立った接客、商品陳列や誘導方法等を研究し、道徳的観点で物事を判断できる生徒の育成が必要である。 ④ 1月生徒株主総会で決算報告並びに業者・お客様へのアンケートを元に課題の検証を行い、さらに「東商デパート目標シート」を通して、次年度に生かす予定である。 ⑤ 道徳教育講演会を実施し、生徒及び教師の意識改革を促した。 実施講演会 9月 商道徳 10月 ユニバーサルデザイン・店舗設計 11月 ビジネスマナー（予定） ⑥ ビジネスプラン講習会（店長・副店長対象）を行い、店内の商品陳列方法、顧客の移動経路等「バリアフリー新法」を意識して、高齢者や障害のある方等にも優しい店舗設計を指導する。</p> <p>2 今後の公開授業・研究発表会の予定(日時等) ① 平成22年11月27日（土）に岡山ドームにおいて「第17回東商デパート」を開催し、事前準備、販売、接待、警備、介助（新規）など生徒が主体となっていく。 ② 公開授業 12月14日（火） 今年度のデパートの取り組みについて各クラス反省会（LHR）を計画している。</p>			

推進校名	備前市立日生東小学校	担当者名	嶋村尚美
所管の教育委員会	備前市教育委員会	担当者名	朝倉健
<p>1 研究の概要</p> <p>(1) 研究テーマ 「自ら伸びる・共に伸びる児童の育成」</p> <p>(2) 研究の内容 進んで人間関係をつくる力を育む内容に重点を置き、道徳教育を推進する。また、家庭や地域との一体的な推進の在り方を模索するとともに、特別活動における実践活動や、体験活動などにおける道徳的実践の工夫を通して、道徳教育の充実を図る。さらに、実践した道徳教育の状況を外部に発表する機会を設けて評価を受けたり、児童の実態観察や児童・保護者・教職員等へのアンケートによる調査結果を分析したりして、研究の成果を検証する。</p> <p>(3) これまでの成果と課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・道徳教育の全体計画、道徳の時間の年間指導計画、学級における指導計画を作成し、実態に沿った、計画的かつ効果的な道徳教育の推進に役立てている。 ・把握している児童の実態とともに、家庭・教職員の願いを踏まえた上で、めざす子ども像を「自分のよさを大切にしながら周囲と主体的にかかわることができる子」と設定し、道徳教育を推進する際の指針としている。 ・めざす子ども像に基づき、内容項目の重点化を図って道徳教育を推進している。めざす子ども像の基盤となる内容項目を、全学級で2-(1)「礼儀」とした。また、自分のよさを大切にする視点からは、のびのび学級・低学年で1-(2)「勤勉・努力」、中・高学年で1-(5)・1-(6)「個性伸長」を、周囲と主体的にかかわる視点からは、のびのび学級・低学年で2-(2)「思いやり・親切」、中学年で2-(3)「信頼・友情」、高学年で4-(3)「役割の自覚と責任」を重点とした。今後は、各発達段階で重点化を図っている3つの内容項目を、より有機的に関連させていきたい。 ・めざす子ども像を具現化するための手だての一つとして、関連的な道徳学習を取り入れた道徳の時間の充実を図っている。重点化した内容項目を中心とする道徳学習を構想し、全学級担任が年に2回ずつ公開授業を行うことで、研鑽を積んでいる。また、各公開授業のうちの1回は外部から助言者を招聘し、指導を仰ぐこととしている。関連的な道徳学習については、道徳の時間と関連活動の接続の仕方をはじめとして、研究の余地が多分にあり、先進校の取り組み等を参考に模索を続けているところである。 ・関連的な道徳学習の実施を中心として、道徳的実践を確実にしていく活動の場を保障している。全教職員と家庭・地域が連携し、特別活動をはじめとする多様な関連活動を組むようにしているが、さらに有効な関連活動の在り方について、研究を深めていきたい。 ・委員会等の児童主体の活動の中で、児童自らがめざす子ども像を意識した取り組みを工夫している。自発的なボランティア、豊かな環境づくり、他者との温かいふれあいなどの活動が軌道に乗りつつある。 ・全教育活動において、心のノートの活用とふり返りの場を大切にするすることで、めざす子ども像の具現化をめざしている。自分の成長と他者のよさに目を向けることが自ずとできるようになりつつあるが、形骸化しないよう、活用の仕方や場の設定において、さらなる工夫が必要である。 ・教職員の「確かな学力づくり」「豊かな心づくり」「健やかな体づくり」の3つのプロジェクトチームがそれぞれ、めざす子ども像を視野に入れた取り組みを提案し、実践に移している。また、今年度は児童とともに「学力づくり」「心づくり」「体づくり」のカテゴリーから構成される「東小ルール&マナーブック」の作成に着手しており、知・徳・体の調和のとれた日常生活を構築する基盤にしたいと考えている。 <p>2 今後の公開授業・研究発表会の予定（日時等） 研究発表会（平成23年、11月頃）</p>			

道徳教育実践研究事業推進校の研究協議 資料

推進校名	赤磐市立城南小学校	担当者名	三宅 康生
所管の教育委員会	赤磐市教育委員会	担当者名	石原 順子
<p>1 研究の概要</p> <p>(1) 研究テーマ 「新しい自分と新しい友達に気づき、ともによりよく生きようとする子どもを目指して」</p> <p>(2) 研究の内容 本校では、研究テーマを次のようにとらえた。 「新しい自分に気付く」とは、日々のくらしや体験活動などでの自分の姿を振り返っていく中で、成長した自分を認めて自信をもったり、次への意欲につなげたりするとともに、自分の思いやめあてを達成するために努力しようとした自分を前向きに認めることにより、今まで気が付かなかった自分の変容や心の中にある新たな気持ちを意識していくことである。また今の自分を客観的にとらえ、ありのままの自分を受け入れた上で、少しでもレベルアップしたいという自身の願いに気付くことでもある。 「新しい友達に気付く」とは、友達のがんばりを素直に認めたり、友達のありがたさを感ぜたりする中で、今まで気が付かなかった友達の思いや新しい側面に気付くとともに、友達の良いところを実感することである。また、人それぞれに様々な価値観があり、誰もがよりよく生きたいという願いをもっていることに気付くことである。友達に助けをもらったり、楽しい出来事を共有したり、新しいことを教えてもらったりする中で、子どもは友達のありがたさを感じていく。友達のがんばりを前向きに受け止めることによって、子どもは自分も負けずじやないかという意欲やがんばりたいという願い、自分もがんばれそうだと見通しをもつことができる。 「ともによりよく生きる」とは、友達とのかかわりの中で、自分の思いを相手に伝えたり相手の思いを受け止めたりしながら、自分や友達のがんばりやよさを認め合って、励まし合ったり励まされたりしながら、今より成長したいという願いやよりよく生きたいという思いをともに高めていくことである。自分や友達の様々な面を前向きに受け止め、いっしょに活動していく中でお互いを高めていくとともに、その高まりをお互いに認め合っていくことである。 子どもは本来、よりよく生きたいという願いをもっている。その願いをエネルギーにして、自分の成長や内面の願い（「新しい自分」）に気づき、それを周りに認められることにより願いの実現への希望をもつことができる。そして友達の成長や内面の願い（「新しい友達」）に気づきながら、お互いのよさを認め合い励まし合うことを通して、よりよく生きていくことができる。 以上の考え方を基に、次の5つの研究課題を軸に実践を進めている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 共感する力や思いやりの心、協力し合う態度を育て、集団や社会の一員としての自覚と責任をはぐくむ道徳教育 ○ 人間としての在り方生き方の自覚を深める道徳教育 ○ 多様な道徳教育用教材の選択・開発とその効果的な活用 ○ 特別活動における実践活動や体験活動などにおける道徳的実践の工夫 ○ 学校段階間、異校種間の連携体制の在り方 <p>(3) これまでの成果と課題 研究テーマのとらえ方を「新しい自分に気付く」をキーワードにして明確にした結果、児童の変容や心の中の変化や願いに気付かせていくことを大切にするという研究の方向性がおぼろげながらもはっきりしてきた。そのために要となる道徳の時間を中心に置き、児童の意識の流れを大切にして、他の教科・領域と関連的に指導していくスタイルを探ることができた。 今後は、はっきりしてきた研究の方向性に沿って、関連的な指導の実践をさらに進めていきたい。その際、校内の行事や教育活動のねらいを道徳の内容項目を視点にして見直し、前述した5つの課題解決に生かしていきたい。</p>			
<p>2 今後の公開授業・研究発表会の予定（日時等）</p> <ul style="list-style-type: none"> 10月中旬 6年生「役割と責任の自覚」 11月上旬 1年生「ともだちといっしょに」 11月下旬 2年生「ともだちっていいな」 12月上旬 3年生「続けてみよう がんばること」 2月下旬 5年生「責任を果たす」 			

道徳教育実践研究事業推進校の研究協議 資料

推進校名	美作市立勝田小学校	担当者名	内田 俊一
所管の教育委員会	美作市教育委員会	担当者名	新田 義純
<p>1 研究の概要</p> <p>(1) 研究テーマ</p> <p style="padding-left: 40px;">豊かな人間関係を築き、互いに助け合える学級集団の育成 ～友だちと協力し合って、学び合い高め合う授業づくり～</p> <p>(2) 研究の内容</p> <p>学校生活の基盤である学級において、「教師との信頼関係や友だちとの関係に安心感がある」集団の中で児童は安心して自己表現ができると考えた。友だちやもの（教材や対象）に主体的にかかわり合い、つたえ合い、たかめ合うことができるのであろう。研究テーマを設定するにあたり、求めたい児童の姿を明確にし、集団づくりの視点をはっきりさせて取り組むこととした。これらは全教育活動で取り組むことではあるが、特に、国語科・道徳・特別活動の教科・領域の特性を生かし、児童の心情を高め、集団の変容を追求していくこととした。</p> <p>① 国語科での取組</p> <p>確かな国語力を身につけ、生活や学習の場で活用することで、豊かな人間関係を築くことのできる児童を育てるため、言語能力・読む力・表現力を身につけさせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・話す・聞く能力を高め、円滑なコミュニケーションができるようにする。 ・適切に表現する力と理解力を身につけ、豊かな感性を育てる。 ・国語科で身につけた能力を他教科・領域等で活用し、生活を豊かにする。 <p>② 道徳での取組</p> <p>道徳教育の目標に基づき、道徳の時間においては各教科・領域等における道徳教育と密接な関連を図りながら、計画的・発展的な指導を行い、道徳的実践力を育成する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各教科等の関連をもたせた指導 ・学級経営との関連をもたせた指導 ・家庭や地域社会との連携を図った指導 <p>③ 特別活動での取組</p> <p>よりよい生活や人間関係を築こうとする自主的・実践的な態度を育てるために、個々の児童がよさを発揮し、よりよく成長できるような集団活動を行い、個と集団を育成する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学級や個々の児童の実態をしっかり見定め、充実した話し合い活動を展開できる授業づくり。 ・縦割り班での学校行事やその他の活動で、自主性が育ち、自信につなげる活動づくり。 <p>(3) これまでの成果と課題</p> <p>学校全体で、3教科・領域を中心に研究を進め、特に、3つの力をどのように育てていくかを明確にして、段階的な指導・支援をすることを続けてきた。少しずつではあるが、児童の発表や表現力に変容が見られている。今後は、3教科・領域の関連性、特に道徳的心情を育てたり、高めたりできる単元・内容や活動の充実に重点をおき、研究を深めていきたいと考えている。</p> <p>2 今後の公開授業・研究発表会の予定(日時等)</p> <p style="padding-left: 40px;">平成22年11月25日(木) 13:00～ 中間発表会</p>			